

月の花挽歌 ～11. 月光川～

11-6

小学四年生の少女が原題『Breakfast at Tiffany,s』の翻訳文庫266頁にリスクを恐れず果敢に挑むことになった。

ニューヨークを舞台に、規格外に魅力的で謎めいた女性主人公が織りなす人間模様を描いた中編小説を、10,000km余り離れた月山の麓にある主に観光を生業としている小さな町の仕舞屋の2階の六畳間の自室で少女は、健気にも難解なジグソーパズルのピースを埋めるがごとく行間を埋めるために多くの時間を費やしていた。

アメリカの歴史や文化と風習の違いなどを調べるにしても、小学校の図書館では埒が明かないので、町立図書館にも通ったけれど必要とする資料は総じて入手できなかった。

自室の窓から眺める月山の景色が夏から秋に変わり、冬へと移ろう季節が訪れても、ピースを埋める手立てに行き詰まっていた少女は、遠めに様子を黙視していた父に実情を打ち明けるしかなかった。

「怖くなったのかい？」

「え？」

「異国の大人の物語をさ？」

「怖くなるほど読み進んでいません」

「私もニューヨークへ行ったことがない。しかし、聞いたところによると、とても忙しい都だそう。どうやらヘップバーンが演じた女性は大都会の片隅に迷い込んだ妖精の化身なんだな。ニューヨークは人種のサラダボウルとも言われているらしい。今度、金港堂で『ニューヨーカー短編集』を買ってくるよ」

子ども扱いをするでもなく、父は石油ストーブに手をかざして、初めてチェスの手解きをしてくれた時のように、ゆっくりとした口調で同等の距離感で接してくれた。

田舎で天才と言われる人でも、そのほとんどが東京へ行くと凡才になるらしいが、真紀ほどの秀才でもアメリカ文学の特徴や魅力のほんの一部を理解できるようになったのは、父が再婚した年で、中学2年生の時だった。

この作家は何を言いたいのか、言葉と言葉の隙間のクオリティを恥ずかしくないレベルで繋げることができないものだろうか……、14歳になった文学少女は手ごわい殻を破ることに夢中だった。

それにしても、小説を映画化するのと同じくらいに原文の翻訳も一筋縄ではいかない。

極端に言えば、『ティファニーで朝食を』がどんなに優れた翻訳だったとしても、トルーマン・カポーティの息遣いを表現するには限界があるのだ。